



新板  
繪入

南本秀乃日記  
一之卷

三


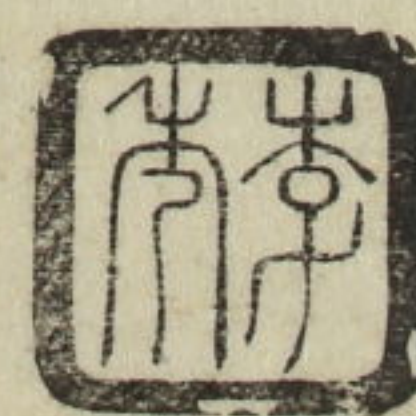
特 別  
A13  
4434  
1



杏本藏書 序

一樹は深小南に何は座席あり乞滞  
 おふ儲方玉辰を佐ら將ら乞子  
 御はは令と二人の童子が教奉りし菜乃  
 の芳き服も去相の暮りぬる徒我  
 肘を曲く枕さる死の友どもつお現よ  
 も羨ふも人の憂ぬむらんと思をせ

風俗の爲に花を咲かす言はれ難く  
 子枝よむるがりぬるは多程也よ及ぬ  
 筆小公南光之巻二巻の目録  
 思笑い草の種荷あり

玉曆七  
 作者  
 素玉  
 瑞笑改  
 李秀  



南本秀日記 一之巻

目録

第一 南本橋氏むぎの人の神社

独娘を重いのほきいふて親着園素

命の世界徳をとり色成所の百鶴

笑く修る一味禪の北條の九代面鏡



第二章 一の義より小山次郎と吉原八郎

るれ身もす附ふさく紫の一嵐

吹くもと扇射のしにたねよまはる

紫をむさゝの打も顔をもれ強ら取

第三章 忠直と貞時とて打撃合

子次郎と鶴の橋常信の天下傾

子代をまゝ移るさ美らるる後の大源産

色とてんさまのあひ女房河内守

第一のあはれ楊氏いひくの人神社

精進寺師平氏もに雨沢のるとにらひ下志ま

忠直も是人あも又人天小栗の性あきたるは

平の自府威名四海を鎮護して政務も庶民の控り

永にふ年正月十日鎌倉幕の諸大名清家人被

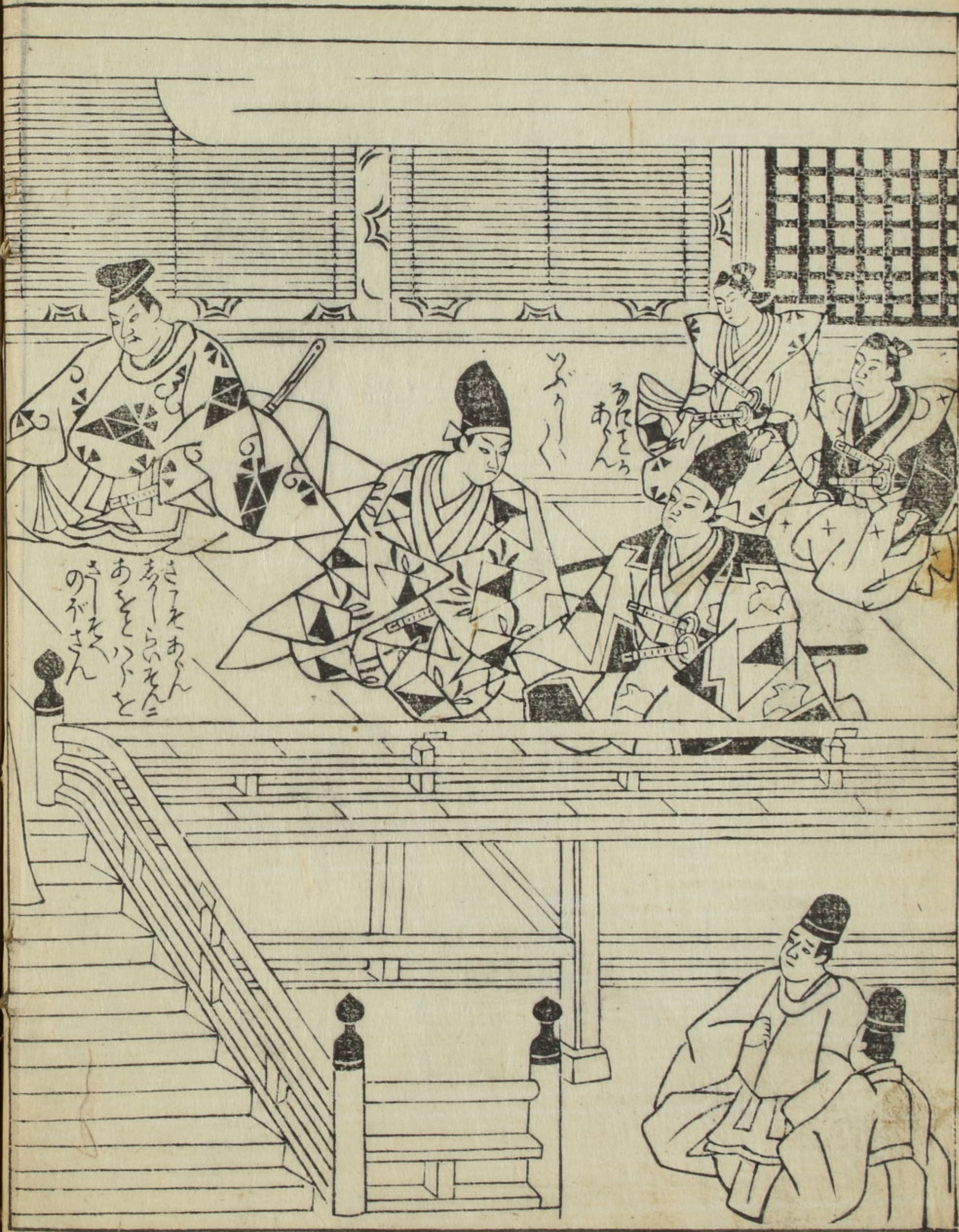
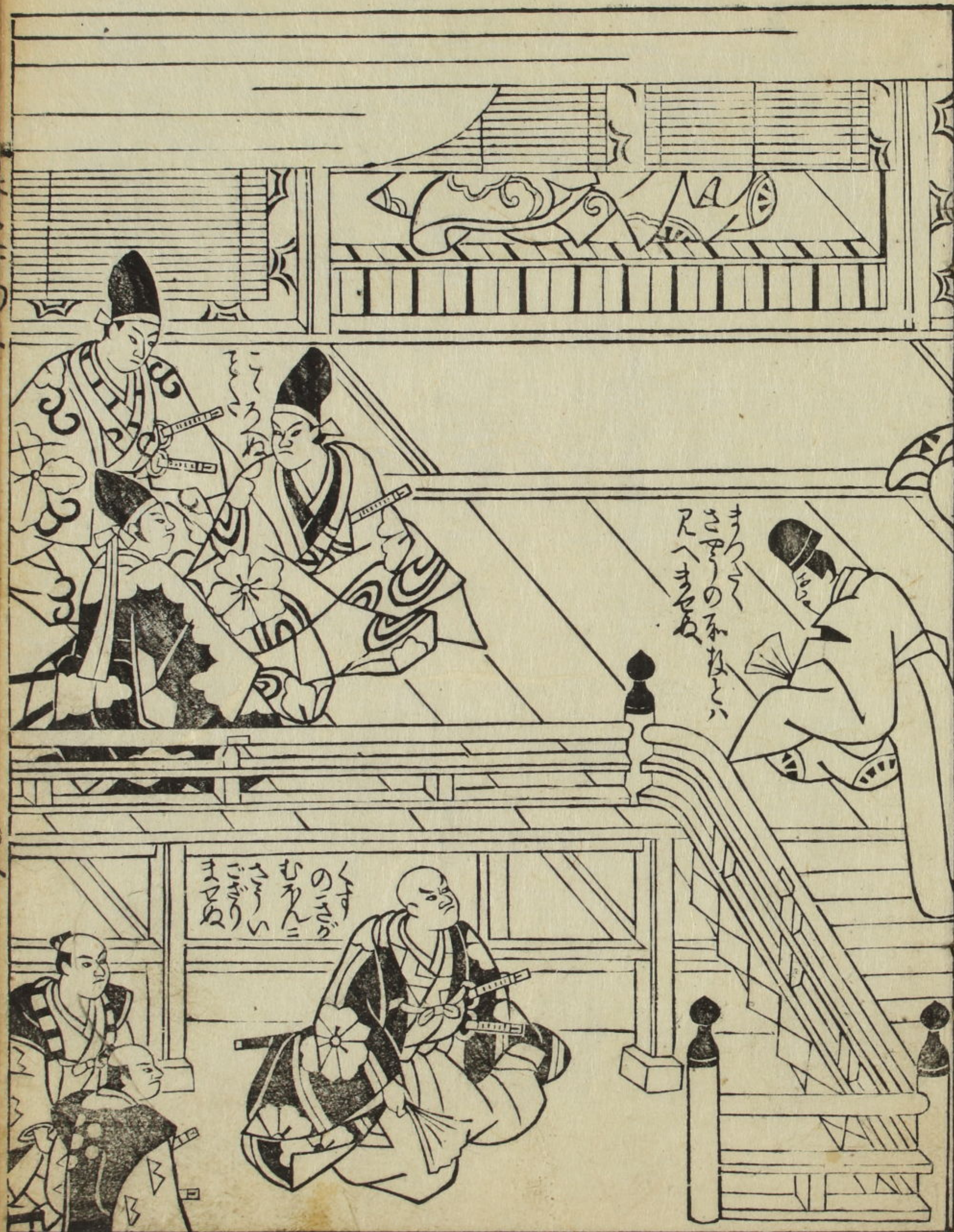
加増も去年十月若見が諫言もあつたの懇切なる

の棟梁も若見も即義就く若神の範頼屋の婿も

伊人徒堂の族多のり一味連判の一卷若見もあ

御焼小尻丸の味と一取まで後と小吉見東軍旗  
 を揚が登智十師に村とりて者いけおまの旗をのをも  
 合まけり西のつらふ。あつしつと吉見の係返奉奉記さる  
 心よりらたねまの恩智が謀由をもしりくぬらんす。し  
 ころしつらみろりせしめて登智中へつらひまもと者いけだ。  
 五取治の事い小難を事さる。と老騎のたまをせしめ  
 するふ捨きんと。作らるるふはつに玉の守儀代未目成る。  
 けつとせしつり河津をたはる奉事と。松野らより河向のま  
 子子のふかふ。恩智が一門あつて中へも松六師をま  
 と申けり。二町は奉事を捕へ敷を達天全の後れおて。松  
 氏の正統しる名乘。やまといの河津に合一の田舎を領せん。し  
 つと餘の百姓まゝ。と道成の許に申りく。守儀代小尻丸なり。

松者お威りくは捕り威まきとしてけりおんま。伊をどし。登智は  
 つとをせし親類。松一味さる。河津大奉とね。奉奉し人教  
 とさし。むん。公と本とにら捕らま。あつて。とまとい。つと  
 貞門義のふとわく。松考へ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 舞う。討まると。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 との松人の頼る。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 と。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 皇年自度友。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 おう。吟味。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 奉事とせし。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。  
 本園大明神の神。水。是。松。自。奉。始。の。神。れ。は。み。たり。ハ。の。ら。ふ。結。



ちり草。貞内ありし出。み。平をれ神。人。の。を。信。と。
 招。也。招。い。梅。も。ん。が。ん。と。委。め。わ。れ。い。ま。し。と。宮。入。の。神。を。信。と。
 人。を。こ。し。二。代。敷。也。天。皇。世。の。孫。橘。諸。君。を。信。一。信。の。た。ん。は。い。て。
 升。も。多。と。早。し。其。神。子。諸。方。を。ま。り。正。方。も。梅。の。之。神。也。信。見。
 二。う。り。代。に。何。身。成。信。汗。の。事。任。役。も。に。何。も。あ。わ。て。
 病。に。ま。ま。ま。う。り。子。息。成。立。部。へ。ま。ど。ま。ま。め。く。今。世。ま。ま。
 一。代。の。神。も。あ。ら。う。仁。義。の。事。士。先。祖。代。れ。何。地。由。何。國。
 多。ね。た。も。當。く。人。ま。ま。あ。ら。う。門。下。使。も。い。れ。も。事。と。信。と。
 慈。悲。を。專。く。し。恩。智。が。姉。を。妻。し。女。子。を。こ。め。く。宮。子。
 あり。し。と。信。く。歌。と。信。貴。の。出。少。門。女。小。祈。り。な。げ。か。く。
 信。く。こ。人。の。男。子。出。ま。し。兄。を。ま。り。丸。と。申。く。ま。り。十一。弟。を。
 信。丸。と。号。し。て。七。葉。德。会。成。り。十。一。を。行。し。不。領。り。て。

賞。賜。地。ま。り。系。勅。の。神。の。心。の。つ。り。心。と。あり。と。力。幸。に。ん。と。
 祈。り。た。ま。し。る。女。子。を。娘。と。し。げ。し。神。を。妻。に。ま。り。ん。と。ま。り。
 英。色。に。め。ま。り。ね。も。梅。が。鳥。美。を。感。じ。め。し。て。の。幸。と。あ。り。
 あ。ら。う。又。ま。り。も。先。小。言。の。あ。ら。う。梅。も。な。ら。う。
 後。い。ま。う。ち。氣。を。た。だ。先。の。い。い。ま。ま。れ。ま。り。て。返。答。と。の。
 一。も。あ。ら。う。其。と。恩。智。も。智。あり。侍。が。こ。ま。の。上。謀。及。小。う。り。
 くと。連。判。も。人。ま。横。い。ば。平。を。梅。古。宅。の。間。が。一。系。神。よ。
 ね。ど。い。か。の。あ。ら。う。申。し。信。ね。よ。志。自。頼。ま。る。が。け。る。み。め。
 ヤ。イ。の。神。宮。の。身。を。信。み。や。い。に。何。一。國。の。守。護。代。兼。持。也。
 事。と。い。ふ。ま。り。身。を。信。み。言。及。な。ら。う。お。の。ま。り。を。の。ま。り。の。
 信。み。今。一。ま。り。が。ら。う。と。力。小。及。を。打。く。あ。ら。う。信。見。と。
 ま。り。神。も。未。度。取。也。一。サ。ア。を。守。護。代。兼。持。を。西。例。み。

と原女一津交申る楊女一津自方が権威するひびき  
らしては、穢も出ても、やうな楊女一津かたも、守後代とあるを  
を重く、と狐の御心を、いつても、娘をよわと奉りしむる  
と、保人といふ、おん根合点系、いふ、守後代をいふ  
我侯よ、まき村を首、うらやま、討く、み、と、藤原香をう  
原國、徳貞以来の中、は、藤原家の、氏社守、護、入、の、我神  
境、さ、ま、み、と、知、る、顔、色、さ、の、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
へ、藤原家の、うらやま、と、の、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
社、い、く、と、う、ら、や、ま、と、の、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
の、企、の、中、を、や、り、と、念、の、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
と、入、り、の、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討

思ふ、と、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
し、恩、を、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
い、ぬ、と、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討

第二一之の段、小太夫と御と、守後代

さ、ら、う、く、見、事、か、と、櫻、や、ら、な、同、う、ら、は、さ、ん、さ、い、と、ら、な、  
つ、ま、げ、の、こ、ん、が、う、風、俗、お、の、布、ど、し、は、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
圓、の、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
ま、ら、は、い、ん、小、太、夫、と、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
て、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
娘、い、ぬ、と、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討  
ら、う、と、お、れ、さ、い、ひ、ひ、り、彼、を、討



なごふとよふれきまは月夜を領分小坂より  
く。歩はるくおぼしき事さうおぼしき小坂  
るに酒とやうりあの人をいふ折角とら  
あのみりよとて國や甲斐をさして神  
多むとの其うへ所さうさうのまらひ  
まの腰のいひらけ出でたて其津用  
さふいといふ名をたて鎌倉の  
うのみ通らるる目録の津の  
あはれをしてあがきさし  
とる幸は初めあつたじり  
あまもとを奉封する河  
くしてあを拵せとてあ  
くしてあを拵せとてあ

後のふも書かす。之流小坂より一か  
いなるがしよる事さうおぼしき小坂  
るに酒とやうりあの人をいふ折角とら  
あのみりよとて國や甲斐をさして神  
多むとの其うへ所さうさうのまらひ  
まの腰のいひらけ出でたて其津用  
さふいといふ名をたて鎌倉の  
うのみ通らるる目録の津の  
あはれをしてあがきさし  
とる幸は初めあつたじり  
あまもとを奉封する河  
くしてあを拵せとてあ

申すに... 弘之... 沖... 入て... の... 不... り... 岩... 倉...

其... 弘... 沖... 入... の... 不... り... 岩... 倉...

みきんやとてうろはハ申はいるは毒いふおかしら底の  
ろうおやく清みはれも申して小修後の清身女は  
月夜サハのども小山の底で幸。百とくうらな  
こはま今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう

いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう  
いふ今宵の清空はよる清空の返事さう

第百三思慮心は負時見とて打置ん

武を和を法を法する法なり。さる角月より一實の武法はこれど  
くも法を法し信しと弁して。そくくおのる名らんや。あま  
小條貞時物に似て極大痛くはまう。老の間に服をまて  
将向するや。清君神聖あるもせんま。験ももさるに。方さ  
いふ。小の事ゆく清の間に。又廣る。一門作つる歴くは。あ  
九菜い。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
目名。小の事ゆく清の間に。又廣る。一門作つる歴くは。あ  
入る。小の事ゆく清の間に。又廣る。一門作つる歴くは。あ  
代。小の事ゆく清の間に。又廣る。一門作つる歴くは。あ

これより。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
清人抱と。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
ま。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
の。馬。小。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
て。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
これ。小。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
先。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
九。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
秘。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
お。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
か。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。  
目。い。さん。小條師時同善時名。赤松。赤松。赤松。



八郎へいへを。蜜と申す。子細わんげ人を押人とにましく。  
ひくく申す。はまき。八郎村。先祖。祖子。羽介。伊賀。素直。出立。  
柘原。素直。剣。作。りの。打。り。右。き。鳥。居。子。と。雀。居。ひ。道。末。彦。  
よ。平。伏。も。貞。河。物。居。り。の。ど。き。と。清。儀。を。く。振。き。み。ひ。  
先。祖。河。改。志。乃。ま。の。小。若。小。く。九。代。少。く。室。の。そ。ん。と。子。相。傳。  
小。申。傳。る。こ。う。轉。の。後。所。朝。夕。れ。と。志。ま。げ。と。に。忍。乃。  
改。を。ま。げ。な。ぶ。と。天。地。の。神。祇。も。見。移。ら。る。ん。や。と。お。の。の。わ。  
の。後。身。に。い。れ。ん。と。清。花。小。と。そ。と。後。の。唐。結。う。代。の。室。と。  
と。る。志。ま。げ。と。取。ち。こ。う。轉。の。先。祖。河。改。自。身。に。出。立。れ。し。  
八。つ。の。角。割。事。の。く。た。の。こ。の。下。の。片。と。い。つ。の。ま。ふ。い。き。み。よ。  
か。び。く。ら。毎。月。と。そ。と。て。族。系。お。さ。さ。ね。よ。び。柄。を。た。九。代。目。  
の。室。原。の。種。の。若。今。を。と。め。流。く。こ。と。下。の。ま。う。と。う。こ。子。

松丸が生れ付子と視ら奉親もあつと云ふが。彼が生得武藝と云ふ。  
森田よまのぞしを流し。ゆい。不。使。の。親。を。ま。る。ま。る。も。長。崎。を。  
し。忠。臣。の。れ。よ。ま。に。守。ま。ん。又。四。人。の。娘。も。一。人。は。名。師。河。に。  
は。ら。う。第。二。回。と。く。對。河。へ。ま。ん。一。第。三。回。出。波。光。定。の。婿。と。  
ふ。と。い。は。す。も。我。家。の。威。勢。に。つ。り。驕。り。小。増。也。と。い。は。れ。威。の。末。  
の。終。母。と。い。は。す。の。ふ。よ。ん。と。末。の。娘。は。え。ぎ。い。其。乃。と。い。は。す。其。  
故。い。は。す。海。も。徳。を。傳。へ。の。百。姓。う。か。く。廣。く。仁。を。敷。い。か。う。い。  
お。の。の。の。海。も。志。氣。ま。つ。ま。つ。を。知。り。よ。か。く。威。を。高。う。ら。ぬ。  
り。け。け。度。に。也。と。云。き。能。く。説。く。を。仕。さ。す。奉。の。百。姓。あ。り。  
か。あ。り。責。て。我。娘。の。末。子。孫。も。ほ。く。さ。う。に。よ。の。志。氣。を。傳。へ。て。若。  
い。う。り。申。渡。さ。ば。一。門。の。あ。ら。う。と。い。は。す。か。市。合。ね。聲。と。好。せん。と。  
娘。の。う。ま。い。と。せ。し。も。折。さ。し。番。今。の。業。花。の。ゆ。さ。し。も。

小栗のことも我限りと未とんと云と自ら何れを威と云え  
 ざくと毒も持たれよ今日償ま家の其やぐけんこいなり  
 々々ぞわくハき菊のハとぞと何れも侍女郎。あて  
 用まの心算を不世とんてのてりし小栗と認せて裸の  
 七門の天右左を給ひ喜張八郎を聲ふきと披病の  
 詞の竹も給ま。江舟にうる杜のまの虫の言と夜よ源流をま  
 終よとめぬあふくわてとれつくらよ也あもぞりた  
 田一とやわが海の雨かまひあまね神の命護のハまきくも  
 ちもふらんと歌をへあふとくといささかさばくハ抱る  
 中も親の代まとい百姓のま後をむとはいしめり津  
 ねぞ免申さんとつよまふまの山まきとちりし。今更  
 五ちあもあささ。ま終の面自にどく。深く何れまきく

買のこのをばをるもあつても。肝は銘になくくまら  
 あがり拙者いしあり河内へ之誠申さん。姫よいきがけ  
 けよみりあり。領をへむ入津まきと小者だ。祝言後  
 けんと。者もふいあまひとびとれとぞま出る。梅もあ  
 へま事お給。葬送のいさか。亡の細めをまら。ま  
 貞何れと最勝をまら。とらり。松丸。後九葉  
 しく。天下れ。枕後。いささ。相模守。鳥羽。入る。宗。羅。い  
 けお。子の。事。ぞ。く。自。分の。銘。知。二。十。八。万。七。千。五。百。の  
 かり。小。栗。と。い。百。廿。二。の。入。子。石。も。天。下。と。学。小。振。り  
 い。小。栗。も。い。が。詞。の。い。さ。も。遠。く。は。少。條。滅。亡。の。時。ま。は。社  
 せ。極。む。く。ま

一之巻終

○ 柘少のりしきまのり

付ありあき 穰あきの田たれかりよ毒くさん麻あしを箱はこの心こころ

あつありあきのほほほほ出でぬりむををと世よ本もと屋や断つ

花色紙龍衣調 全初五冊

并な

花はなの色いろまま紫むらさくくのの我われ身み世よもものの紙かみ

右みぎよよみみがが田た正ただ月つき二につつりり年とし出でししをを申まをしし

由よし求もとめめ後のちをを彩いろとといい 板いた元もと八はち丈ぢやう字じ屋や八はち寸すん信しんつ



